第53回 労働リーダーシップコース開催報告

金属労協組織総務局部長　上口 智子

2022年10月13日から29日まで、京都・関西セミナーハウスにおいて、第53回労働リーダーシップコースを開催した。今年も新型コロナウイルス感染者が落ち着いているとはいえまだ終息していない中、感染防止対策を徹底し開催した。4本の柱に基づく全人格的教育をめざし、21名の受講生が研鑽に励んだ。以下、所感も交えながら報告する。

開校式
―非日常の日々が始まる

緊張した顔、顔、顔。マスク越しからも緊張感が手に取るようにわかる。そんな開校式は2022年10月13日（木）10時、篠笛の音色から始まった。

開校式では、労働リーダーシップコース校長の式辞の後、植木朝子名誉校長（同志社大学学長）が挨拶に立ち「合宿研修で得られる学びへの姿勢やコミュニケーションが今後の皆さんの能力をさらに伸ばしていく糧となる。今回のプログラムが皆さんの充実した学びの時となることを期待する」と激励した。また主催者代表の金子金属労協議長は「目と目を合わせ、同じ空気を吸って、良い経験を積んでいただきたい」と述べた。来賓の厚生労働省・岸本政策統括官からは「安心・安全に働ける世の中、人生に納得や満足が得られる世の中を築いていけるのも、各職場・現場でのしっかりした労使関係が基礎となっている。良い緊張感で職場の課題を解決する、その積み重ねが企業・産業、さらには社会の成長につながっていると確信している。皆さんのこれからの活躍を祈念する」と激励を受けた。次に関西ブロック・嶋本代表が、続いて、石田光男副校長が挨拶に立ち受講生を激励した。最後に受講生を代表して昭和電線労組中央執行委員・池田晃平さんが受講生宣誓を行い、開校式を終了した。

開校式で決意表明を読み上げる受講生代表

オリエンテーションでの梅田事務局長の言葉「不便と非日常を楽しんでください」。この言葉の意味をしみじみと感じる2週間半が始まった。

講義とゼミと特別プログラムと

全人格的人間形成を目指すことを目的とする研修は、グループディスカッションを取り入れた「組合戦略づくり」やPCで実際にデータ分析を行う「統計学」、講師が受講生に質問しながら講義を進める「労働経済学」など、座学だけではない特徴的な講義も行っている。また結論を出すことが目的ではなく議論経過の充実に重点を置いているゼミナールでは、「時代の求める労働組合の役割」をメインテーマに、5つのゼミに分かれて4回にわたり討議を重ねた。最後にはゼミごとにパワーポイントを使って発表を行い、成果を共有しあった。

第53回コースのゼミナールテーマは以下のとおり。

○香川ゼミ（指導：香川孝三神戸大学／大阪女学院大学名誉教授）
『労働組合と国際』～人権デュー・ディリジェンスと労働組合としての対応

○石田ゼミ（指導：石田光男同志社大学名誉教授）
『労働組合と職場』～働き方改革を労働組合の力で

○中田ゼミ（指導：中田喜文同志社大学教授）
『労働組合と社会』～仕事と処遇納得性のある給与水準

○上田ゼミ（指導：上田眞士同志社大学教授）

『労働組合と企業』～そこに愛はあるんか

○寺井ゼミ（指導：寺井基博同志社大学准教授）

『労働組合と働き方』～みんながHAPPYになるため

その他、京都の歴史や自然を感じられる体験型プログラムも実施している。関西セミナーハウス内にあるお茶室「清心庵」で体験するお茶室体験、鞍馬山の自然を感じられる「鞍馬山散策」、禅寺の「圓光寺」で体験する座禅など、非日常の体験ができるのも労働リーダーシップコースの魅力の一つだろう。

受講生の受講生による受講生のための第53回コース

労働リーダーシップコースは「それぞれの人格を尊重しながら、自由と規律の中に一緒に学びあう」という考えのもと始まった。

一般的な研修とは違い、労働リーダーシップコースは受講生が主体的な運営を行うことを基本としている。講義の司会進行、講義以外のプログラムを企画するのも受講生。朝のラジオ体操も受講生の当番が行う。完全合宿のため、普段の生活で不自由がないかなど受講生の意見を取りまとめるのも受講生の中から編成する実行委員会が担う。

「朝の散歩」ー さあこれから一日がんばろう！！

右／「お茶室体験」ー 自分でお茶を点てました
上／「座禅体験」ー 自分と向き合った一時間

「交流会」ー どこまで高くできるかな？

「組合戦略づくり」ー 組合員にとっての労働組合とは？ 真剣に考えました

「貿易ゲーム」ー 初めての共同作業、うまく交渉できた？

「特別討論会」ー 三役と、とことん語り合いました

例えば「討論会」のテーマを決め、司会進行するのも受講生から選ばれた討論会委員が行う。今年は受講生だけで行う討論会では「労働組合の存在意義」など3つのテーマを、金属労協三役と語る特別討論会では「労働組合のデジタル化やDXについて」「労働組合における組合員のキャリア支援について」など5つのテーマで議論し合った。お仕着せではない、受講生の受講生による受講生のための研修、これが労働リーダーシップコースの最大の特徴であり伝統となっている。

感染拡大防止策VS.交流

感染者数がピークの時よりも落ち着いてきたとはいえ、まだまだ予断を許さない中での開催のため、感染拡大防止対策は必須だった。週2回の抗原検査、毎日の体調チェックと体温測定、手指の消毒、黙食、マスク着用、換気・・・。そのような中、いかに受講生間の交流・コミュニケーションを行うか、実行委員会での検討が始まった。

特に受講生同士の交流を目的に行う「交流会」をいかに盛り上げるか、腕の見せ所である。

「密」は避けなければいけない、し

かし交流は図りたい。そこで提案されたのが、ストローでタワーを作り高さを競う企画。同じゼミ生以外の人と交流ができるようにグループはくじ引きで決めることとした。当日はゼミ担当講師も加わってのタワー作成。使えるのは本数制限のあるストローとはさみだけ。土台をしっかり作るには？どうやって組み合わせる？高くするにはどうする？と相談しながら、でも制限時間は迫ってくる…。ものづくりの技術を生かしながらの共同作業で皆の心が一つになったと感じた。

閉校式―卒業は終わりではなく「始まり」

2022年10月29日（土）朝から出発（たびだち）の集いを行い、受講生一人ひとり、感想を述べ合った。

閉校式で答辞を読み上げる水上級長

最後のゼミナールが始まる前、全員で記念撮影

その後、閉校式を行った。式辞として香川孝三校長（神戸大学名誉教授）が「皆さんにはこの2週間、すばらしい能力を発揮していただいた。その能力を今後の活動でも発揮していただきたい。今後の活躍に期待している」と激励し、21名全員に修了証書を授与した。主催者代表挨拶として梅田利也金属労協事務局長が挨拶に立ち「今我々は変化の大きな波の中にいる。労働組合の果たすべき役割・重要性がますます高まっている。組合の最大の武器は『人』である。組合のこれからを担っていくのはここにいる皆さんである。ぜひ、その気概を持ち続け、さらには次の世代にもその思いをつなげていってほしい」と述べた。その後、ゼミナール担当講師の石田副校長（同志社大学名誉教授）、中田運営委員（同志社大学教授）、上田眞士運営委員（同志社大学教授）、寺井運営委員（同志社大学准教授）が修了生を激励した。受講生代表としての答辞では、第53回級長の全本田労連・水上佑輔中央執行委員が研修期間中の思い出を語るとともに、今後の決意を表明、「卒業の歌」を全員で合唱し、閉校式を終えた。

以前、卒業式は英語で「commence-ment」と言い、『始まり』という意味であると聞いたことがある。級長が答辞で「自分が今何をなすべきかを考え、組合員と家族の幸せの実現のために行動に移していきます」と宣言した。この期間中学んだこと、ゼミナールで議論したこと、夜ロビーで仲間と語り合ったこと、それらを糧にこれから行動に移していく、まさしく「始まり」である。

次回、第54回開催へ

労働リーダーシップコース（旧西日本）の修了生は通算1807名、旧東日本コース（第1～40回）の939名と合わせて、2746名となった。

次回、第54回コースは2023年10月12日（木）～28日（土）の日程で開催する。新型コロナウイルス感染症がどのような状況になっているのか定かではないが、次回も受講した方が「受講して良かった」と何か一つでも多くの物を掴んで帰っていただけるようなコースにしたい。

実行委員会

各ゼミナールから班長各1名互選し、計5名で実行委員会を編成する。実行委員会の中から1名級長を互選する。コースは受講生の主体的な運営を基本とし、実行委員会がその中心となる。全体ミーティングで選出された第53回コースの実行委員会メンバーは次のとおり。

級　長：水上 佑輔（全本田労連、上田ゼミ班長）
副級長：脇田 洋平（シャープ労組東日本支部、香川ゼミ班長）
花本 靖大（ＪＦＥスチール福山労組、石田ゼミ班長）
野口　繁（パナソニックオートモーティブシステムズ労組松本支部、中田ゼミ班長）
池尻 亮輔（パナソニックエレクトリックワークス労組エナジーシステム支部、寺井ゼミ班長）

※集合写真はマスクを外していますが、写真撮影の時のみマスクを外しています。

第53回 労働リーダーシップコースに参加して

第 53 回労働リーダーシップコース級長
全本田労連　中央執行委員　水上 佑輔

コロナ対応が緩和しつつある今振り返ると、当時はまだまだ行動制限と感染症対策の徹底が求められる中での開催でした。

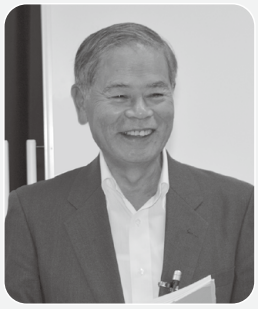
しかし、事務局をはじめとする関係者の方々による多くの苦労や工夫の結果、私たちもこれまで語り継がれてきた名物カリキュラムを経験することができ、とても贅沢な時間を過ごすことができました。

組織と世代を超えて、多くの方に支えられていることを実感し、この歴史と伝統あるコースを修了できたことを本当に誇りに思います。各出身労組からの数々の差し入れも、労組ならではの繋がりと温かさを感じる嬉しい体験でした。寝食を共にした第 53 回生の皆さん含め、関わっていただいた方に改めて感謝いたします。

これからどんな日々が始まるのか？そんな期待と不安を抱えた初日でしたが、「せっかくだから最大限楽しみたい」と思い、私は級長を引き受けました。

また、この経験が「いつか誰かの役に立つ」のではなく、「私たちの行動のキッカケにつながるよう、皆がチャレンジできる機会を作りたい」と考えました。組織の中でリーダーの役割を担う者は一人であっても、リーダーシップは皆が発揮するものであると私は考えています。

私たちの活動は、皆が想いを一つにチャレンジし続けることで、社会に良い影響を与えられるものであり、過度に失敗を恐れる必要はないと思っています。これからも、このコースでの経験も活かし、いつまでも誇れる産業にすべく職場から相場形成していきたいと思います。



第 53 回 労働リーダーシップコースを振り返って

労働リーダーシップコース校長
神戸大学・大阪女学院大学名誉教授
香川 孝三（かがわ・こうぞう）

今、第 53 回労働リーダーシップコースで閉校式の後、全員で写した記念写真を見ています。21 名が参加し、去年より人数が若干増えました。第8波のコロナ禍が広がり始めた時期でありましたが、事故なく全員が修了できたことはよかったと思います。コロナ禍でも、関西セミナーハウスでの生活に不自由さを感じることは少なかったと思います。新型コロナウイルスに慣れてきたせいでしょう。

受講生 21名中女性は4名で、2 割を占めています。写真でも真ん中に並んで写っています。女性の受講生が増えることで、労働リーダーシップコースの活気が上昇していくような気がします。今後もこれ以上の女性の受講生が増えることを期待したいと思います。

今回は新しい講義として「ビジネスに実装される最新の技術動向」が加わりました。例年、受講生の半分ぐらいは技術系出身であることや、組合活動をおこなう上でも技術系の知識が必要な場面があることを想定して設けられました。しかし、アンケート結果をみると、受講生は少々戸惑いを感じたようです。運営委員会としては、技術と組合活動との関係を整理して、授業に生かせるような工夫をしなければならないと思いました。ＡＩ技術が進歩して、我々の生活に無視できない影響を与え始めていることを考慮すると、受講生の関心を引く授業にしていかなければと思います。

１つのゼミは４～５名で構成、受講生間の議論は活発におこなわれ、ゼミ発表の準備がなされたように思われます。ゼミ発表には工夫を凝らしてわかりやすく説明がなされました。例年のことでありますが、まとまりの良さにはいつも感心させられます。内容もうまくまとめているが、まとめすぎていないか心配になりました。簡単には答えの出ないテーマに取り組んでいたので、対応に苦労している点も発表に追加してもいいのかなと思いました。